



華やかなものほど、あっけなく終わり、後には余韻と、ちょっと寂しげな感覚が残る。祭りの後、昔からそういう言葉があるように、最高潮に達してから、いきなり終わった花火の余韻に、俺たちはしばらく浸っていた。

「さて、そろそろ帰らないとね。お父さん、片付けよろしくね」

そう切り出すのはお袋の役目である。この中で、お袋ほど適任者はいないだろう。特に、隣でいい気持ちになっている親父に対しては。

「じゃ、俺も手伝うわ」

俺がそう言って立ち上がろうとすると、沙依が浴衣の袖を引っ張る。

「なんだ、沙依」

「ううん、なんでもないよ。もう少しこうしていたいな〜とかちよつと思っただけ」

「さて、お開きにしますか。お父さん、帰るよ!」

沙依は立ち上がると、酔っ払っている親父の肩を軽く揺すった。

「楽しかったですね。これだけでも来て良かったです」

「だよ。久しぶりに日本の夏って感じだったよ。ねえ、美月」

「そうね」

美月は一言だけ返すと立ち上がって、おもむろに片付けを始める。周囲の人たちも三々五々散っていき、俺たちが帰る頃には、だいぶ人も少なくなっていた。

「なんか、ちょっと寂しいね。もう少し盛り上がっていた気がするな」

「そうですね。お祭りの後の寂しさみたいな」

「それ、わかります。このあとうちで盛り上がりましょう・・・って言いたいところなんですけど、うちじゃ狭いですよね」

「それじゃ、皆でうちに来る?」

「いいんですか、美月さん」

「いいわよ。男子たちも、ご両親も、皆で来るといいわ。おばあちゃんも、おじいちゃんも歓迎してくれると思うわ」

「おお、大宴会になりそうじゃん。いいねいいね。そうしよう」

「でも、ご迷惑になりませんか？もう時間もだいぶ遅くなってますし」

「大丈夫よ。ちよつと連絡してみるわ」

そう言うと美月はコミュニケーションを取り出して、実家に連絡する。

「大丈夫よ。大歓迎だつて言ってるわ。ケンジのご両親ともお話したいそうよ」

「おお、美月ったら、どさくさにまぎれてご紹介・・・かな」

「あんたねえ、それどういう意味よ。変なこと言わないでくれる」

「ほらほら、照れない照れない」

お約束の突っ込みを入れるケイに美月が食ってかかる。でも、俺だつて、家族ごと美月の実家にお邪魔するのはちよつと恥ずかしい気がする。

「あら、美月ちゃん、ほんとうにいいのかしら。それに、この人ったら、こんな状態だし」

お袋が、いい加減でへべれけになっている親父を見て言う。

「ん？ 大丈夫大丈夫、俺は酔ってないぞー」

と親父は言うのだが、酔っ払っていることは誰の目にも明らかである。

「お父さん、しっかりしてよ。はいお水。これ飲んでちよつとお酒をさましてね。あとで、ちよつとお話もあるんだから」

沙依がそう言つて差し出したコップの水を親父はぐいっと飲み干す。

「話ってなんだ？」

「それは後から。そこ片付けるから、ちよつとどいててね」

沙依は親父を立たせると、親父が食い散らかした残骸を片付けにかかる。結局、俺たちは、

その後、全員で美月の実家に押しかけることになったのである。



その頃、アカデミーは大騒ぎになっていた。フランクの報告で理事会が招集され、集められた情報が検討された。その結果、太陽系惑星評議会に対し、緊急警報が発せられ、同時に、アカデミーでは、技術的な対応策を検討するためのプロジェクトチームが組織されたのである。当然、その中心的なメンバーとして、フランクとデイブが参加することが決まっていた。警報を受けて緊急の遠隔会議を招集した評議会では、事態を重く見て、アカデミーが対応策に目途をつけるまでの間は、この情報を公表せず、対応が万一失敗した場合の対処策を検討することになったようである。

「やはり重力遮蔽が一番有効だな」

シミュレーション結果を見ながらフランクが言う。

「それでも単に重力を遮蔽するだけでは、ちよつと不十分じゃないか？ 軌道変更はできるにはできるが、ぎりぎりの線だ。ちよつとでも制御が狂えば、太陽系への影響は避けられないぞ」

フランクの脇でデイブが言う。

「やはり、もつと詳細な情報が必要だな。近くまで無人機を飛ばして情報を集めるか。だが、ここまでのシミュレーションでは、もうあまり時間の余裕がない。余裕を見て3ヶ月、遅くても半年以内に制御を開始できないと間に合わないぞ」

「重力遮蔽の準備にどれくらいかかる？ かなりの数のシールド発生機と、それにエネルギーを供給できる大型船が必要になるだろう」

「そうだな。ざつと5千機の発生機に、少なくとも巡航艦クラスの船が100隻以上は必要だろうな。船はかき集めるとしても、発生機は足りないだろう。製造が間に合うかどうか。故障の可能性を考えると予備機もほしい。3ヶ月と言わず、まずは、ありったけを集めて、一刻も早く制御を開始した方がよさそうだな。その方が時間を稼げる」

「善は急げで、実際に行つて出来るところから始めるか」

「そうだな。俺はすぐに計画を作つて、評議会に持つて行く。当面の輸送と全体の指揮拠点として、ヘラクレス3を借りようと思うんだが、どうだろうか」

「そう思つて、さつき船長には話をつけてある。幸いにも荷下ろしは終わつていて、当面の

仕事はキャンセルできそうだから、準備ができ次第、いつでも動けるぞ」

「それは、ありがたい。実際に制御をかけながら、シミュレーションをやり直して微調整していく必要があるから、ヘラクレス3のコンピュータの支援も必要になるだろうしな」

「それがいい。あつちとこつちは一心同体だからな。センターコンピュータの能力もフルに使えるだろう。いっそ、こいつに全体の計画も考えさせてみたらどうだ。面白い結果を出してくるかもしれんぞ」

「そうだな。シールド発生機の生産と配備の計画なんかも含めてできると助かる」

「よし、それじゃ、早速やらせてみよう。センターコンピュータの通信網を使えば生産企業の状況や物流系の状況も収拾できるだろう。通信の許可と各企業に対する情報提供の依頼は、そつちで頼むぞ」

「わかった。早速、評議会経由で依頼を出してもらおう」

ダイブは、コンピュータのコンソールに向かうと、手短に指示を入力する。とたんに量子演算ユニットが激しくまたたき始めた。

「なるほど、それはいい考えかもしれないな・・・」

ダイブがつぶやく。

「どうした？」

「いや、こいつが言うには、生産や在庫関連の情報を得る手続きの間の時間ももつたいないので、先遣隊を送って詳細な情報収集を始めたのだそうだ。そうすれば、必要なシールド発生機の数より正確にはじけるから調達計画が立てやすいだろうと」

「なるほど。それじゃ、俺が行こう。幸いに手元には新型の宇宙艇もあるしな」

「SF2Aか。羨ましいな」

「正確には、学生訓練用のST2Aだな。問題はクルーの人選だが」

「おいおい、本気か？こいつ、お前の学生たちと一緒に連れて行けと言ってるぞ」

「たしかに、奴らなら、あの宇宙艇に、ある程度慣れてはいるが、基礎過程の学生たちにはちよつと荷が重いんじゃないか？」

「こいつは自分がサポートできると言っている。特に中井ケンジと星野美月の2人は不可欠だと。意味がよくわからんのだが、あの2人とは、特別な関係を作れるんだそうだ」

「エイブラムスが言っていたことに関係がありそうだな。もともと、この件はこいつが彼らに情報を流したことが発端だし。ただ、学生を実任務に連れ出すには、理事会の許可をとらなはいといけない。もう少し詳しい理由が知りたいんだが」

「ちょっと待てよ。それは俺も知りたい」

ダイブはそう言うと、またコンソールに向かう。

「それは本当なのか？彼らが？まさか・・・」

「どうした？」

「聞いて驚くなよ。あの娘と坊主の2人は、こいつらと抽象思考ベースのコミュニケーションができるらしい。彼らさえ同意してくれば、彼らが見聞きしている情報を共有しながら、必要な知識を直接送り込むことも可能だと。信じられるか？」

「信じろと言う方が無理じゃないか？だいたい抽象思考が伝達可能なインターフェイスを持っている人間なんて聞いたことがないぞ。百歩譲ってアンリの娘なら・・・というのは考えられないことは無いが、中井までとなるとちょっと信じがたい。だいたいハードウェアが対応できないだろう」

「詳細は本人たちか、エイブラムス、エドワーズの2人に聞けばわかるそうだが」

「わかった。急いで確認してみよう。ちょっと連絡をとってみる」

そう言うとフランクは足早に部屋を出て行った。

「なにやら妙な話になってきたな。さて、俺は何をしたらいい？」

ダイブはコンソールをのぞき込んで、そうつぶやいた。



一方、美月の実家では、全員が集合していた。

「さあさ、ゆっくりしてくださいな。たいしたおもてなしもできませんが」

なにやら、ご馳走がならんだ和室のテーブルを前に、飲み物を持ってきた美月の祖母が言う。俺たちはテーブルの周り車座になると、思い思いに話し始めた。大人たちは、その脇で小宴会を催している。親父は、あきれるお袋を横目に、またしてもビールを片手に、ご機嫌になっている。美月の祖父母は温厚な感じで、美月からはちよつと想像しがたい感じである。4人でどんな話をしているのか、ちよつと気になるところではあるのだが、こっちはこっちで、またしてもつばぜり合いをやっている美月とケイから目が離せない。マリナとサムは2人でなにやら話をしているが、マリナはちよつと眠そうである。ジョージは、既にうとうとしている。

「ねえ、お兄ちゃん。お父さんが潰れちゃう前に、あの話、しておいたほうがよくない？」

沙依が脇に来てささやく。

「そうだな。ちよつと親父を呼んできてくれ。ちよつとみんな、いいかな」

「なによ、今ちよつと忙しいだけど・・・」

ケイと睨み合いをしていた美月が言う。

「例の話だ。昨日の晩、親父とジョージがあれこれ調べてくれたんだが、サムのほうでも何かわかったようだし、ちよつと話を整理したいんだが」

「そうそう。それ気になってたんだよね。皆で謎解きか。面白そう」

「あんたね、人ごとだと思って、いい加減なこと言ったら承知しないんだからね」

「まてまて、喧嘩は後だ。ジョージ、まずは昨日わかったことを説明してくれないか」

「OK、知っての通り、現象としては、大きく2つあるよね。ひとつは、ケンジと美月の夢の話。それから、昨夜の星の幻影だ。これは、ケンジと美月だけじゃなくて、沙依ちゃんも見ている」

ジョージは、小型のホログラム投影機を持ち出して、話を進める。

「どうやら、この両者にはケンジと美月、そして沙依ちゃんのD Iユニットが関係しているらしいことがわかったんだ。実際、ケンジのお父さんによれば、この3人のユニットはすべて、ケンジのお父さんが作ったもので、同じ仕様のものだそうだ」

「えへへ、お揃いですっ」

沙依が、左手のD Iユニットを見せびらかす。

「こら沙依、静かにしてろ！」

「はい」

「ジョージ、続けてくれ」

「それで、このD Iユニットには、いずれも特殊な機能が実装されている。ケンジのお父さんが昔研究していた、抽象思考コーディング方式のインターフェイス機能だ。これは、人間の思考を言語に変換することなく伝送するための理論に基づいている。僕もその論文は以前アカデミーの図書館で読んだんだけど、とても興味深いものだったよ。ただ、この機能は実験的なもので、それに対応する神経回路側のインターフェイスがなければ機能しない。実際、そのようなインターフェイスはまだ実用化されていないはずだから、この機能は使われるはずのない機能なんだ」

「でも、それが機能した……」

そう言ったのはサムだ。

「そうなんだ。サム、君も気がついたんだね」

「美月と沙依ちゃんのD Iユニットを調べたら、確かにその回路に信号が流れた形跡があった。夢の時間帯は、アカデミーの学生専用回線から大量のデータが回路に流れ込んでいた」

「やはりね。こっちも同じだ。ケンジのユニットにもアカデミーの専用回線からデータが流れ込んでいたよ。ちなみに、ケンジが今のD Iユニットを手に入れたのは一昨日だけど、以前のD Iユニットにも同じ機能が実装されていて、そちらにも、地球に来るときのシャトル内で同じように信号が流れ込んでいた。それと、海に行ったときは、僕のコンピュータを経由して、美月の宇宙局直通回線に接続していたんだけど、その通信に割り込む形で、アカデミーから通信が入っていたんだ」

「その後、俺の家で親父とお袋と俺の3人で、またやってみたんだが、同じ回路が入っているにもかかわらず、見えたのは俺だけだったよな」

「そうだね。あの時は、美月の回線の代わりに、僕の持っているプロジェクトのアカウント

を使って、アカデミー経由で宇宙局に接続していたんだ。で、調べて見たら、アカデミーの中で、通信に割り込む形でデータが流れ込んでいた。だから、いずれも、データの出所はアカデミーで間違いないと思う」

「そして、状況から推定して、3人は、抽象思考伝送に対応する神経系のインターフェイスを持っている」

「そう考えるのが一番素直なんだけど、残念ながらアカデミーでも、その種のインターフェイスが開発されたなんて話は聞いたことがない。それが一番大きな謎だよ」

「私は、もしかしたらその可能性があるのよね。ちょっと癩に障るけど、パパがおもしろ半分には正体不明のインターフェイスを山ほど入れてくれたから」

「でも、それは難しいんじゃないかな」

口を挟んだのは親父である。

「そもそも、理論はたしかに、もう20年近く前にできあがってはいたけれど、その実装を考えたのは、ほんの数年前だ。アンリだって、少なくとも、そのDIユニットを渡すまでは、知らなかったはずだ。ならば、美月ちゃんが生まれる前に組み込むことはできないと思うが。それに、俺たちはケンジと沙依に、そんなインターフェイスを入れた覚えもない」

「そこが、一番大きな謎だよ。どうして、俺と沙依まで、そんなことになってるのか、って話だが」

「3人が同意するなら、遺伝子解析を試みる手もある」

「たしかにそうだけど、ちよつとデリケートな話だから、無理強いはできないよね、サム」

「遺伝子解析か、あまり気持ちのいい話じゃないな」

「私がかまわないわよ。この際だから、パパがどんなものを入れたのか、洗いざらい調べて見るのも悪くないわ」

美月が言う。たしかに、彼女にしてみれば、父親が何を入れたのかを知りたい気持ちも強いのだろうが、俺ばかりか、沙依も巻き込むのはあまり気が進まない。そう思っていた時に、ジョージのコミュニケーションに着信があった。

「フランク先生だ。はい、エイブラムスです。何かわかりましたか？」

そう言えば、ジョージは通信の件をフランクに頼んで調べてもらおうと言っていた。その話だろうか。

「はい、そうです。データは二人のD Iユニットに流れていました。え、回路ですか？それが、ちよつと一言では説明しにくいのですが、なんと言ったらいいか、本来使われるはずのない回路に流れ込んでいたようですが・・・そうです。たしかに抽象思考インターフェイスですが、どうしてそれを？ いえ、僕はそのあたりは、よくわかりません」

「ジョージ君、私が説明しようか」

そう言ったのは親父だった。

「助かります。先生、ちよつとケンジのお父さんに代わりますね」

「中井健太です。いや、浅沼健太と言った方がいいかもしれない。覚えてませんか。昔、コペルニクスでお会いしましたよね」

そうだった。親父は昔、フランク先生と面識があるのだ。どうやら、向こうも思い出したようで、ちよつと昔話をした後、しばらく話し込んでいた。まさか、先生も俺の親父と知り合いだったなんて想像もしていなかっただろう。

「データの送りがわかったそうさ。この前、ジョージ君が言っていた新型のコンピュータらしい。しかも、送られたデータは、抽象思考コーディングされたものだそうさ。ちよつと信じがたいが、彼が言うには、コンピュータは唯一連絡ができる相手に、今起こっている事態を伝えたかったらしい」

「事態？あの夢や星が、その事態を意味するって言うのか？」

「俺もよくわからんが、それについて彼から君らに頼みがあるそうさ。ジョージ君、全員に音声共有できるかな」

「わかりました。共有しますね」

そう言いながら、ジョージはコミュニケータを音声共有モードに切り替える。こうすると、音声をD I経由で共有できる。

「諸君、フランク・リーブスだ。これから話すことは、当分、我々の中だけでとどめて欲しい。落ち着いて聞いてくれ。現在、太陽系のはずれを、超高速の褐色矮星が、こちらに向かっている。およそ10年後に、地球と火星の軌道の間を通過することになるが、質量が木星の3倍近い褐色矮星が、しかも超高速で太陽系内を通過したら、どのようなことになるか、君たちもわかると思う。現在、惑星評議会の指示でアカデミーは、その対応策を検討中だ。唯一の手段は、重力シールドを展開して、太陽や周辺の恒星と褐色矮星が引き合うのを妨害し、軌道を

変えることだが、そのためには、詳細な情報を集めることが必要になる。現在、必要なシールド発生機や、それにエネルギーを供給するための船の手配を行っているが、時間が無いので先遣隊を送ってデータを集め、シミュレーションの精度を高める必要がある。ついては、君たちにその協力をたのみたい」

「俺たちに、つてどういうことですか？」

「現在、対応計画のシミュレーションは、新しく稼働を始めたコンピュータが行っている。エイブラムスは知っていると思うが、ヘラクレス3に搭載されていたもののクローンだ。それが君たちを指名したんだ。理由は、うすうす気がついていられるかもしれないが、抽象思考によるコミュニケーションが可能なことだ。それにより、必要な情報を瞬時に交換できることが今回のミッションに必要だと、コンピュータが言っている」

「でも、抽象思考でのコミュニケーションなんて、俺たちはまともにやったことがないですよ。大丈夫なんですか？」

「必要なサポートは、コンピュータが言っている。それ以上のことは俺にもわからないのだ。だが、事態の重大さはわかってもらえると思う。協力してもらえらるなら、君たちには、私と一緒に、先遣隊として調査に行ってもらいたい」

これはまた、いきなり大変な話になった。これは俺一人で結論を出せることじゃない。

「どうする？俺はともかく、チームでということなら、全員の意見を聞く必要があると思う」

「私がかまわないわ。役に立てるなら行くべきよね」

「面白そうじゃない？太陽系の外縁部まで行くんですよ。なかなか行ける所じゃないし」

「あんたね、遊びに行くんじゃないわよ」

「行くとしたら、ST2Aを使うんですよ。僕も行きたい」

「興味深い。褐色矮星の軌道を変えるなんて前代未聞。私も参加したい」

「あの、私がかまいませんが、危険はないんでしょうか」

マリナは、さすがに冷静である。

「危険が無いと言えは嘘になる。もちろん、データ収集を行うことが目的だし、褐色矮星からは十分に距離を取って行動するが、これは学生の君たちを本来巻き込むべきではないミッションだ。不測の事態が起きる可能性はゼロではない。君たちが断っても誰も責めることはできないだろう」

「そうですね。でも、そうした危険は日頃の訓練でも同じですよ」

「マリナの言うとおりよ。これまでだって、色んな事があったじゃない。それに比べたらリ

スクはむしろ低いわね」

「なによりも、急がないと大変なことになるわけだから、ここで行かないって言う選択肢はないんじゃないかな」

「同意」

「皆さんがそうおっしゃるなら私も異議はありません。行きましょう」

「よし、決まりだな。先生、先遣隊引き受けます」

「わかった。だが、中井のご両親はどうなんだ。今の状況だとお前一人で決められる訳じゃあるまい」

「親父、お袋、そういう状況なんだ。いいよな」

「事態はわかった。やむを得ないだろう。行くからにはしっかりとやってこい」

「ちよっと心配だけど、あなたたちしかできないことなら、仕方が無いわね。くれぐれも気をつけて。無茶はしないでね」

美月が祖父母の方を見る。

「心配しないって言ったら嘘になるけど、皆さんが一緒なら安心ね。きっと美空も同じだと
思うわよ。ねえ、おじいさん」

「そうだな。気をつけて行っておいで。美月も美空に似てちよっと無鉄砲なところがあるからな、無理は禁物だよ」

「わかってるわ」

美月はそう言うと、俺の方を見る。

「先生、お聞きの通りです。これからどうすればいいですか？」

「ありがとうございます。最終的には、これから理事会に君たちを同行することを報告して了解をもらわなければいけない。結果が出て準備ができるまでの間は休んでいてくれ。そっちは、もう夜中だろう。明日の朝、改めて連絡するが、おそらく、すぐに戻ってきてもらうことになる。一応、準備はしておいてほしい」

「わかりました。準備を整えておきます」

さて、どうやら俺たちの夏休みは終了ということらしい。

「それじゃ、今日はお開きだな。これ以上夜更かしはしないほうがよからう」

「そうね。準備もあるだろうから、一度帰りますか？」

親父とお袋が言う。たしかに、俺とジョージはそのほうが支度をしやすい。女子たちとは、明日の朝、どうするかが決まってるから落ち合ってもいいだろう。

「それじゃ、俺とジョージは一緒に戻ろう。明日の朝、先生から連絡があったら、場所を決めて合流だ。それでいいかな」

「いいわ。女子はここね。明日の朝、支度して連絡を待つわ」

「よろしくたのむ。それじゃ、明日・・・」

俺たちは、美月の祖父母に挨拶をすると、車を呼んで、俺の実家に戻った。そろそろ日付が変わる頃である。荷物はそれほど多くないので、大急ぎでパッキングして、とりあえず寝ることにする。さて、明日からは気が抜けないから、今のうちに寝ておこう。そう思うのだが、なにやら目がさえて眠れない。どうやらジョージも同じのようだ。俺たちは、しばらく悶々と寝返りを繰り返していたが、やがて眠りに落ちた。